



「仏やもむくろになりしおらが春」

新春下総中山・法華寺 「むくろ」と「むくろじ」

川口幸宏

1月5日、爽やかな冬晴れの午後の一時、貴婦人とともに下総中山・法華経寺を遊歩した。つまり初詣である。正月も三ヶ日を過ぎてしまうと初詣に出かける人影は非常に少なく、マイ・ペースで歩を進めることができたのありがたい。そのおかげというのだろうか、人混みにまみれ、背を押され、急かされる思いではとうてい目に入らないような「事実」とその「事実」に対する感慨などの「発見」があった。「こいつは春から～(チョン!)縁起がいいわい～(チョン!チョン!チョン!)」と見得を切りたくもなる。季節感からしてみれば、法華経寺境内には「花の色」というものは何もない。例の人の例の歌「花の色は移りにけりないたずらに・・・」を拝借して、「花の色は無かりしけりないたずらに・・・」なのである。「冬の花と言えば椿でしょ?椿もないのですかねえ」とはぼくのつぶやき。ことほど左様に色気のない遊歩の始まりであった。冬枯れと形容するのが一番か。そして、花の色がないだけの冬枯れなのではなく、「むくろ」とでも言うべき枯光景の幾つかの発見—まあこれも、ぼくと貴婦人との遊歩らしいと言えらしいのだろう。

それでは、ごくごく短い時間でしかない旅路だが、お寺さんにおける「むくろ」発見の旅路、とどのつまりが「むくろじ」へのご案内しよう。

中山法華経寺開山は13世紀に遡るそうだ。開祖は富木常忍という人、境内に日常聖人像があるがその人である。しかし、景観的に言えばたださえその近辺にある五重塔、大仏に押されてしまっており、参道から少し奥まり、御手洗場の屋根、樹木に隠れてしまっており、色を失せている感じさえする。それとも聖人は奥ゆかしき人だったのだろうか。貴婦人と、「なんだか侘びしい扱いの感じがしますねえ。」と感想を述べあった。ぼくたちの見方に従えば、これも一種の「むくろ」であろう。聖人像が「むくろ」なのではなく、その扱いの精神が「むくろ」。念のため。富木常忍は得度を得る前、近在住民に働きかけて、今で言うところのキャンパを集め、1260(文応元)年に法華堂を建立したそうだから、俗人時代から非常に求道の篤い人であった。その法華堂は国指定重要文化財であり、日蓮宗最古の本堂だそうである。



中山法華経寺はJR下総中山駅から千葉街道、京成線を越えて参道が一直線に走っている。京成線を越えてすぐ総門(黒門)続いて仁王門(赤門)が待ち受けている。脱線だが、黒

門の直前、脇に入ったところに、「成田屋」さんという鰻屋がある。とてもお気に入りの店だが、地元商店街の案内地図には載せられていない。脱線ついでに、仁王門付近では猫たちがひなたぼっこをしている。この猫たちは野良だが、法華経寺参拝客抛出の「ネコ基金」によって、多くは避妊・去勢手術がなされているようだ。人間と猫との共生空間だからなのだろう、猫たちは人見知りをしないのがほとんどである。

仁王門を過ぎて左右に幾つかの寺や院が続く。それらが跡切れると茶屋が賑わいを見せる。里芋の子を皮付きのままゆでた「きぬかつぎ」は、今の季節の参道の名物か。子どもの頃、畑から掘り出した里芋にちょこんと付いたちいさな塊（「里芋の子」）をぼろりぼろりと手でもぎ取り、茹でて、その熱々を、ツルンと皮を剥き、塩をちょんちょんと付けて、口に放り込んだことを思い出す。冬場のいいおやつだった。茶屋の「きぬかつぎ」は、ぼくの記憶にある「里芋の子」よりはるかに大きく、ザル盛りで売り出され、すでに冷え切っている。これも、ぼくの記憶にある「風物詩」からすれば「むくろ」なのである。



左写真は「祖師堂」正面遠景。宗派開祖日蓮と歴代6祖を祀ってあるとか。建立は1678(延宝6)年、「比翼入母屋造り」というたいそう珍しい建築様式なのだそう。側面から見ると大きな屋根が二つ重なって見えるのが特徴だと、案内にある。残念ながら、この写真ではまるで村の鎮守様のようにさえ見えてしまう。

参道を本堂に向かって進んでいくと、御手洗場と煙で燻される場所（名称をわかりません）とがある。御手洗場は神道から来ているのではないかとぼくは勝手に思っているのだが、どうなのだろう。お参りの前に忘れてはいけないのが、心身を清めること。水と煙はその儀式。これが転じて、身中の疫病を追い出す。ところがである、そっと聞き耳を立ててみれば、「禿ませんように」「頭がよくりますように」などと、「禿」や「知能」までもが疫病扱いにされてしまっている一きつと、そういう精神こそが現代病という疫病なのでしょうねー。いや何ね、これから本堂に上がって仏の加護を祈るわけでしょ？その前にすでに水と煙で加護を何かにお祈りしたんじゃ、本物に対してたいそう失礼な行為なのではないか、などとゲスは勘ぐるわけなのであります。このあたりも、本来の宗教儀式を手前に都合よく解釈してしまっているという見方をすれば、その精神は「むくろ」なのである。で、我が貴婦人も燻される、煙にまかれる、いやなにその、心身を清めたもうたのでありました。

さあ、祖師堂に上がる。参拝所には例によって大きな賽銭箱。そしてその手前高所には銅鑼が吊されている。お賽銭を投げて、銅鑼を打ち、願い事を胸中で呟く……。

この銅鑼は、他所では大鈴であったりするのだが、ぼくなどは、これらを打ち鳴らすその瞬間にこそ俗世の煩悩などを振り払うことが出来るのだと小さい頃から信じてきた。神仏に加護を祈る際でありはしても、銅鑼や鈴の音を可能な限り大きく打ち鳴らすという力

作業はまさに自力本願、無信仰者の勝手な言い分だと言えばそうなのだろうが、せめてその行為にこそ宗教的ななにかを覚えるからこそ、お参りを繰り返してきた。我が居住地近所の白山神社がどれほどに荒れ果てていようとも、本殿前の鈴の音が響く限り、我が家族は初詣を繰り返してきたのだ。



さあ、銅鑼を鳴らすぞ！・・・ん？・・・打ち紐がない。頭上を見上げてみると、写真のように、打ち紐は巻き上げられてしまっている。初詣の人々が一人ひとり銅鑼を鳴らしていた日にゃ行列が延々と続いてしまう、銅鑼など鳴らさなくてよろしい、賽銭を備えればそれで加護の祈願は聞き届けられる、そういう寺側の判断がなされた結果のだろう。宗教的儀式というのは一つひとつの手順に深い意味が込められている、そう説教を日常的にありがたそうに垂れているのは、どこのどのポーズなのだった！

「仏に加護を祈る」という神秘的な儀式であるはずのものがこうも疎略に扱われてしまっただけでは、「仏やもむくろになりしおらが春」との俳句を献上したくなる。まあ、わが国の政治における教育や生活・福祉の扱いと同じだわな。あっちのお上もこっちのお上も、みな、「むくろ」。悲しいかな、それでも我ら下々は、細々とした腕を組みあわせて、御加護のあらんことを心の底から願い上げ奉るのである。

ぼくのような邪心を持つ者の願いなど聞き届けてくださりはすまいが、とにかく祖師堂でのお参りを済ませ、法華経寺境内の散策に移った。幾度か訪れたことがあるけれども、その度に新しい「何か」の発見がある。この日もその「何か」の発見を求め、聖教殿（「しょうきょうでん」と読むのだそう）に向かった。自然の山道を擬しているのだろうか、それとも、単に手入れをしないために荒れ果てているのだろうか、赤土がむきだしとなり植木の根も露わな土手に挟まれた道を進んでいくと、舍利塔を思わせる建築物にぶつかる。それが聖教殿である。1930年建立の石造りで、案内掲示によると、東京帝国大学教授の宗教建築学者という権威に権威を重ねたような人の設計になるという。さて、この聖教殿の案内掲示板の一文。当該箇所は「中山法華経寺には、日蓮大聖人の御直筆、国宝、観心本尊抄、立正安国論を始め重要文化財六十四点、その他が格護されてありますが、その完全な保存をはかるために建てられたものであります。云々」とある。いや、これは何とも難解な文章。具体物、抽象物、それから国宝と重要文化財との「財貨」関係。貴婦人と謎解きをした結果、「敢えて皮肉を持って解釈すれば、恐らくこのような意味であろう」という結論に達した。「中山法華経寺には、①日蓮大聖人の直筆、これは国宝、②勸心本尊抄、立正安国論など、これらは重要文化財、③その他がある、聖教殿はそれらを保存するために建築された。」ちなみに、多少ともこれらについての知識がある者にとっては、この掲示板文章は誤った、もしくは誤認を招く表記となっていることは言うまでもない。（じつは、後刻、大きな誤読であることを知らされることになるのだが・・・）文責は「法華経寺」

とある。もう、こうなれば、中山法華経寺全体が「むくろ」としか言えないと、ぼくは思うのである。お寺さんがそうなのだからこっちもそれでいい、というわけにはいかない。ぼくと貴婦人は、掲示板が真に伝えたい内容と、それを正しく伝える日本文にし直したいものだとの思いを、強く持った。だが、その場では、その解決は後日に回すことで暗黙の了解となった次第である。



散策を終え、ぼくたちは境内を離れた。その散策の途中では、



本物の、自然のむくろに出会い、感慨深いものを覚えた。立て木がほぼ根本から折れてできあがったむくろ、立て木の幹に出来た洞などもぼくに言わせればむくろの一種、そしてこの季節にと驚かされた蟬の抜け殻。その内的な意識はともかく人間の手で作り出された「むくろ」には「骸」の字をあてたくなっていたのだが、こうして見

出した自然が作り出す「むくろ」には「軀」という字をあてたくなる。

しかし待てよ、こんなことの「発見」を綴るために、ぼくはこの一文を認めているのか？「骸寺日記」、「軀寺日記」なのか？確かにそれはぼくが「発見」した「事実」であり、「事実」に対するぼくの「感慨」を綴ったものであることには違いない。しかし、なのである。それではご同道いただいた貴婦人に対して、とても失礼である。もっともっと素敵な「発見」と「感慨」が貴婦人によってもたらされたのだから。

仁王門（赤門）をくぐり出て参道を下りはじめたところ、貴婦人が立ち止まってなにやら見ておられる。参道近辺の商店街が参拝客や観光客に案内掲示している「市川市文化の街かど回遊マップ 中山編秋～冬」であった。貴婦人は、ぼくが盛んに口にしていた二つのこと、つまり一つは聖教殿に納められている文化財の本当の財貨や名称など、あと一つは中山法華経寺の冬の色について、マップで確かめられないかとお覧になったわけである。第1の疑問については明解が書かれていた。「中山の文化財」の欄が設けられ、公開・非公開を含め、かなり詳しく書かれていた。



それによって「日蓮大聖人の御直筆、国宝、観心本尊抄、立正安国論を始め重要文化財・・・」の部分を書き改めるならば、「国指定重要文化財である日蓮大聖人の御直筆、国宝である観心本尊抄・立正安国論を始め、重要な文化財・・・」となる。第2の疑問については「中山回遊・百樹万華鏡」という欄が設けられている。それには金木犀（きんもくせい）・石榴（ざくろ）・銀杏（いちょう）そして無患子がイラスト入りで紹介され、解説が加えられている。これらは法華経寺の「色」（匂いも含む）を象徴するものであるという。金木犀・石榴・銀杏はぼくの日常生活圏にもあり、またかつての法華経寺訪問の際に「色」を楽しんだこともあったが、無患子は、その漢字表記を見る限り、未知であった。「無患子の黄葉は初冬の柔ら

かい光を透かして光ります。」そして「中山では法華経寺妙見堂のそばにおそらくただ一本あります。」との案内文に、ぼくはいたく興味を持った。マップは商店街の各店に置かれているとあるので近くの仏具仏壇店でそれぞれが入手し、マップを凝視した。「戻ります？」という貴婦人のありがたい声にももちろん足は参道を再び上る。「今は初冬じゃないから黄葉は光を透かしていないと思いますよ。」と貴婦人。ぼくは正月はじめは初冬だと思いこんでいたが、とんでもない非常識、初春なのですね。「落葉樹のようですから木に葉っぱを付けていないと思いますよ。」とも。ぼくは無患子の実が木に付いているかもしれないと思い、あるいは根本に落ちているかもしれないと思ったが、とんでもない季節感。無患子の実が正月風習の羽根突きのあのつきばねの黒い丸い玉であるということが、一切の思い違いを招いている。あの黒い丸い玉の源、つまり花は6月頃に開くのだ。

無患子ーむくろじーの木は、水子地蔵の側に立っていた。水子地蔵の回りは夥しい数の

無縁墓であった。この世に生を受けずして命を絶った（断たされた）者たちを弔うその場にたった一本の「子に患いが無いように」との願いを込めた「むくろじ」の古木。すぐ側の葉陰に張り付いていた蟬の抜け殻が心にずんと響いてきた小さな景色だった。

無患子の花の咲く頃、また来ましょう。